

文学における神話と宗教—『フェードル』の場合

輪 田 裕

1. はじめに

筆者が大学に入りたての頃、教室では「ヨーロッパ文化を理解しようとしたら、聖書とギリシャ神話は必ず読んでおかなければならない」と言われたものだった。今日でも、それは真実ではないかと思うのだが、今の学生にそれを教室で言っても、果たしてどれほど耳を傾けてくれるだろうか。

さて、2013年度のゼミでは、ラシーヌの『フェードル』¹を題材にすることにしたり、すでにシラバスにもその旨書いてしまったので、そうすることになるのだが、不安は尽きない。なぜなら、この作品にはギリシャ神話への言及が多くあるばかりではなく、作品全体の重要なモチーフにもなっているからである。そもそもタイトルロールのフェードル（パイドラと表記する場合もある）²の母バジファエというのが、怪物ミノタウロスを産んだ女性であり、バジファエの父親が太陽神のヘリオスなのだから、まさに人間と神がきわめて近い距離にあった頃を舞台にしている。こうした神話的世界については、17世紀の、それも木戸銭を払ってでも芝居を見に来るほどの観客にとっては、何も難しい話ではない。むしろ、幼少時から耳になじんだ内容であったろう。ちょうど、日本人にとって『竹取物語』がそうであるように。

しかし、神々が登場する『古事記』はどうだろうか。因幡の白ウサギのような、幼児向けエピソード以外、日

本の学生の果たしてどれほどが知っているだろうか。まして、時間的にも空間的にも遠いギリシャの神話を讀んだことがある学生は、かなり少ないことが予想される。

そこで、ここではそうした学生を意識しつつ、ギリシャの神話的世界と、この芝居が上演された17世紀フランスのキリスト教文化を題材に、『フェードル』を見てゆくことにする。したがって以下は思い付き程度のエッセーというもので、学術的意味合いはあまりないものとして読んでいただきたい。

なお、引用はあえて岩波文庫訳を使っている。

2. あらすじ

多くの方にとって退屈であろうが、何も知らない学生のため、作品のあらすじを述べることから始めたい。

時代はギリシャ神話の時代で、舞台はアテネの南、エーゲ海に面したトレゼーヌの港町である。トレゼーヌは国王テゼー（テーセウス）が支配し、テゼーはアテネの国王を兼ねている。しかし、テゼーは現在行方不明で、所在が知れない。幕が開くと、テゼーと女族アマゾンの女王アンチオーブとの間に生まれた青年イポリット（ヒュポリトス）が、行方不明の父テゼーを探すという口実でトレゼーヌを離れようとしている。だが、本当の理由は彼がアリシーを恋してしまったからであった。イポリットは父を尊敬しながら、母の血を受け継ぎ、父の恋

¹フェードル アンドロマック：渡辺守章訳、岩波、2012

²日本語表記については主に岩波文庫の渡辺訳に従うが、日本語として一般的な表記に従った場合もある。また、どちらか判断のつかない場合にはカッコ内に高津春繁著「ギリシャ・ローマ辞典」（1960、岩波出版）の表記を付した。

愛遍歴を嫌悪し、結婚以外の恋愛を憎悪していたが、アリシーとは結婚できない運命であった。というのも、テゼーがアテネの王になるとき、パラース一族と争い、テゼーはパラースの50人の兄弟すべてを滅ぼし、唯一生き残ったパラースの妹アリシーには、子を作らせぬため結婚禁止を定めたうえで、手元に置いていたからであった。一方、テゼーの現在の妻であるフェードルは今や死の瀬戸際において、その病の原因が道ならぬ恋にあり、その相手というのがイポリットであることが、乳母エノーヌの懇願によって彼女の口から明かされる。そこにテゼー死去の報がもたらされる。エノーヌは、テゼーとの間に生まれた子供のために生きるように、また今やイポリットへの恋は罪にはならないと説得し、フェードルに生きる気力を与える。(第一幕)

以前よりイポリットに恋していたアリシーは、別れを告げに来たイポリットから愛を打ち明けられる。そのことを知らぬフェードルはイポリットに恋の告白をするが、イポリットは拒絶する。彼女が逃げ去る前にフェードルの手に彼の剣が残される。(第二幕)

イポリットに告白したことを悔いるフェードルのもとに夫テゼー帰還の報が入る。死を決意するフェードルに乳母エノーヌは、イポリットの残した剣を利用して汚名をイポリットになすりつけるようにと助言する。テゼーは妻とイポリットの挙動に不審を抱く。(第三幕)

エノーヌの言葉を信じたテゼーはイポリットを叱責し、アリシーを愛していると弁明するイポリットに怒りを募らせ、ネプチューンの神にイポリットへの制裁を祈願する。テゼーよりアリシーのことを聞かされたフェードルは嫉妬に狂い、怒りの矛先をエノーヌに向ける。(第四幕)

イポリットはアリシーに別れを告げ、出立する。アリシーの言葉に疑念を募らせたテゼーがエノーヌを呼び出すと、すでにエノーヌは自殺している。そこにイポリットの死が報じられる。絶望するテゼーの前でフェードルはすべてを打ち明け自殺する。(第五幕)

3. 『フェードル』の異教的テーマ

キリスト教文化の中であって、古代ギリシャが異教文化であることに間違いはないが、人文主義の流れはキリスト教の聖典であるラテン語聖書にも見直しを迫り、原語のギリシャ語やヘブライ語研究をもとにした、新しいフランス語訳聖書が登場して久しいこの時代、単に異教

的テーマとはいっても、それだけで非難されるような時代ではなくなっていた。まして、演劇の世界では聖なる世界のみを描く聖史劇はとうに民衆の関心から遠ざかり、生身の人間を生き生きと描くことが必須になっていた。

ラシーヌ以前に悲劇作家としてすでに名声を確立していたコルネイユが得意分野としていたのは、同じ異教文化とはいえ古代ローマの政治舞台であったが、ラシーヌの出世作は古代ギリシャを題材としていた。こうした古典・古代を題材にしていたことから、後にこの時代を古典主義時代と呼ぶことになるのだが、ギリシャであれローマであれ、手本とすべきは異教文化で花開いた文芸であり、歴史であった。それは長くキリスト教の聖史劇にあきあきしていた民衆にとって、新しく斬新に見えたであろう。

また、悲劇は、一般庶民の悲劇を描くという発想はなかった。そもそも一般庶民は現実が悲劇的であって、あえて描くほどの物ではなかった。英雄や貴人がその高みから転落すること、それが悲劇として迎えられる。悲惨は偉大さの証であった。

すべてこれらの悲惨そのものが、人間の偉大を証明する。それは王侯の悲惨であり、位を奪われた国王の悲惨である。(『パンセ』、116)³

こうした国王や貴人の転落の人生を観客に見せるには、よほど後ろ盾が強大であるか、そもそも成功を一切必要としない作家でないかぎり、古代時代を題材に描くのが安全であった。今の貴人の転落を描くことはあまりに危険なことであった。それは遠い時代の伝説的神話の世界のことであり、「いま・ここ」ではない。それゆえ、異教的テーマは芝居の枠組みにとってはなほ都合であった。作家の力量は、そうした異教的世界の中であって、いかに「いま・ここ」にいる観客を感動させるかであった。

いうまでもなく、『フェードル』はギリシャの、それもきわめて神話的世界を舞台にしている。したがって、ギリシャ神話に登場する固有名詞がかなり登場する。『アンドロマック』が子供向けのおとぎ話と信じられていたトロイ戦争の後日談であるとするれば、『フェードル』はテゼーによるミノタウロス退治の後日談である。上半身が牛で、下半身が人間である怪物ミノタウロスと、それを退治する英雄テゼーの冒険物語は子供たちにとっても極めて魅力的であったろう。そうしたおとぎ話的な英雄

³ パスカルの『パンセ』出典：定本パンセ(上)、松浪信三郎訳、注、講談社、昭和46年。

原文：Toutes ces misères-là même prouvent sa grandeur. Ce sont misères de grand seigneur. Misères d'un roi dépossédé.(Pascal : Œuvres complètes, prés. L. Lafuma, Ed. du Seuil, 1963)

譚を現実の「いま・ここ」の物語にするため、つまりリアリティーを与えるために、ラシーヌはギリシャ神話に由来する伝説を頻繁に引用するとともに、現実世界を混在させる。

こうした意図のもと、たとえば、地理的に実在する地名とともに、伝説の地名を織り込む。トレゼース、コリントスというギリシャ半島の地名を並べた直後に、三途の川アケロンがあらわれる。

ご心配は当然と、お望みのままに、わたくしは
// 隈なく捜しました、コリントスの隔てる二つの海を。// テゼー様の跡を求めて、アケロンの河が冥府へ降る // かの辺境の人々にも会ってみました。(第一幕第一場、岩波、p.144-145)⁴

また、実在の海を並べた後には、イカロスの名を登場させる。

エーリスの国も訪れ、タイナロンの岬をまわって、// イカロス墜落を見たもう一つの海までも。(第一幕第一場、岩波、p.145)⁵

第一幕の冒頭からラシーヌは神話世界と実在の世界を、まるで縦糸と横糸を織るかのように織り交ぜてゆく。

第一幕第一場にはさらに、英雄ヘラクレスの名とともにテゼーの名を並べ、彼が退治したプロキュスト、セルシオン、シロン、シニス、エピダウロス、ミノタウロスの名前を列挙することによって、彼がヘラクレスに匹敵する神話的大英雄であることを強調する。言うまでもなく、ヘラクレスもテゼーもともに神話の人物に他ならないが、舞台上とはいえ、観客の目の前に現れるテゼーは他の登場人物と異なることのない生身の人間として現れるのであって、神秘劇における非現実的な能力を発揮するわけではない。彼もまた神々の力の前で無力であって、一度口にした願いが神々に聞き入れられると、それを元に戻す力はない。つまり、テゼーは偉大なる英雄ではあるが、欠点に事欠かない一人の男として描かれる。事実、息子イポリットからみれば、誇るべき父であるとともに、恥ずべき男でもあった。

どれほど幸せか、後の世に、かくも見事な物語の // この恥ずべき面を残さずに済むというなら。(第一幕第一場、岩波、p.150)⁶

しかしながら、このように二人の英雄を並べることで、神と人間の中間にある英雄ヘラクレスと（舞台上の＝現実の）テゼーが隣接し、神々の物語と人間の物語が交じり合う。

ギリシャ神話の神々の名も繰り返し登場する。ヴェニヌス、ネプチューン、ヘリオスなどがそれである。ヴェニヌスは愛の神であり、アフロディーテとも同一視される。海神ネプチューンはポセイドンとも同一視され、三つ又の槍を持ち馬に乗る姿が彫刻などでなじみである。ヘリオスは太陽神で『フェードル』の中では幾度となく暗示的に登場する。これらの神々は『フェードル』の悲劇を構成する基本的枠組みとしてばかりではなく、ネプチューンのようにイポリットの死に直接的に関与することもある。ここでも神話と（劇的）現実が交差している。

ネプチューンは馬術の守り神であり、また海を支配し、時に津波を起こしたりする最強の神でもあった。一説によれば、フェードルの父ミノスはネプチューンから預かった牡牛の素晴らしさに魅せられ、海神への返却を厭い、偽って身代わりの牛を返却するのだが、これに怒った海神の呪いによって、妃パジファエは牡牛と交わり、怪獣ミノタウロスを産んだ。ラシーヌはこの説は採用せず、あくまで愛神ヴェニヌスの怒りを原因として、パジファエと二人の娘（アリアヌとフェードル）の悲劇を作り上げている。

イポリットの死は直接的にはテゼーによる神への祈りによって引き起こされるのではあるが、他方、ラシーヌはイポリットが馬術を疎かにし、ヴェニヌスに膝を屈したことが、あたかも彼の悲劇の遠因であるかのように描く。

浅ましいこの混乱の最中、一人の神が現れて、
// 三叉矛に、砂にまみれた馬の脇腹、突き刺す姿が見えたとか。(中略) 見たのです、陛下、見たのです。おいたわしい若様が // 手塩にかけた愛馬のために引きまわされるお姿を。(第五幕第六場、岩波、p.252-253)⁷

神とはネプチューンのことで、イポリットはかつてこの神を崇拝していたが、アリアヌを愛することによってヴェニヌスに膝を屈し、乗馬を疎かにしてしまっていた。その結果、愛馬に引きずり回されるという、イポリットにとって屈辱的な最後を迎えることになる。ラシー

⁴Déjà, pour satisfaire à votre juste crainte, // J'ai couru les deux mers que sépare Corinthe : // J'ai demandé Thésée aux peuples de ces bords // Où l'on voit l'Achéron se perdre chez les morts;(v.9-12, Racine : Œuvres complètes, prés. P. Clarac, Ed.du Seuil, 1962)

⁵J'ai visité l'Elide, et, laissant le Ténare, // Passé jusqu'à la mer qui vit tomber Icare.(v.13-14, ibid.)

⁶Heureux si j'avais pu ravir à la mémoire // Cette indigne moitié d'une si belle histoire.(v.93-94, ibid.)

⁷On dit qu'on a vu même, en ce désordre affreux, // Un dieu qui d'aiguillons pressait leur flanc poudreux. //() // J'ai vu, seigneur, j'ai vu votre malheureux fils // Traîné par les cheveux que sa main a nourris. (v.1539-1540, v.1547-1548, ibid.)

ヌはあくまでヴェニウスの呪いを中心に悲劇を組み立てているが、ミノタウロスの伝説に関わるネプチューンを巧みにつなぎ合わせている。

以上のように、異教的ギリシャ神話のテーマは、枠組みとして作品全体を支えているばかりではなく、劇的現実に巧みに寄り添いディテールの中にまで入り込む。いや、そればかりではない。登場人物の性格まで規定しているのである。

たとえば、イポリットの性格は、アマゾン女族の王であった母親のアンチオプの性格を受け継いでいる。アマゾン女族は女ばかりの軍事集団で、戦争することで男を捕虜として生け捕り、子供を産ませる道具として利用し、子供が男の子であれば、これを殺し、女だけを育てる。質実剛健であり、恋愛を拒否する。その血を引いたイポリットは「雄々しく」、「栄華も喧噪も」厭い、「自尊心」にあふれ、「恥ずべき」「恋の軛」に従うことを拒否する。そのイポリットがこともあろうにアリシーに恋をする。恋は、彼の養育係であるテラメヌスの言うとおりに「死すべき人間の定め」であることに間違いはないにしても、しかし同時に武勲輝かしい英雄であるとともに、数知れないほどの色恋を遍歴した父親テゼーの血でもある。

イポリットばかりではない。その最たる例がフェードルその人である。フェードルという複雑な性格は、すでに一幕一場に語られている。すなわちフェードルを暗示する「ミノスとパジファエの娘」の一句がそれだ。フェードルは、クレタ島の国王ミノスとその妻パジファエの娘である。フェードルに迫害されたイポリットが、嫌悪のあまりフェードルの名を直接口にすることを避け、「ミノスとパジファエの娘」と婉曲に表現すること自体は、彼がフェードルを嫌っていることから何の驚きもない。名指しすることに耐えられないほど、イポリットにとって疎ましい存在なのだから。したがって、イポリットがそのようにフェードルの名前を婉曲に表現したことに深い意味はない。にもかかわらず、この婉曲表現にはそれだけにはとどまらない意味が含まれている。そこには、フェードルの宿命と複雑な性格が凝縮されている。

ミノスは単にクレタの国王というばかりではない。彼は死者の審判者でもある。闇の世界において正義を体現している。一方パジファエが牡牛と交わり怪物ミノタウロスを生んだこと、これはまぎれもなくおぞましい罪である。つまり正義の代弁者である父と罪深い母の間にフェードルは誕生したことになる。道徳の象徴である父は死の闇世界において正義を象徴するし、情欲の罪を犯した母は、太陽神ヘリオスの娘でありながら、暗い罪を背負っている。ミノスとパジファエは死者の闇の世界と太陽神、つまり、闇と光を象徴し、審判者の夫と罪人たる

妻とは正義と罪の象徴である。闇=罪、光=正義ではなく、闇の正義と光の罪なのであって、闇と光、正義と罪が交差するところにフェードルは誕生している。これがフェードルの複雑な、自意識に引き裂かれた性格を説明している。

いうまでもないが、こうした光と闇の複雑に交差する世界は、神は善にして光とするキリスト教の一元的世界において、まさに異教の世界であり、『フェードル』は異教的テーマを基本的な枠組みとして構想されたのだといえるだろう。

4. 『フェードル』におけるキリスト教的テーマ

この芝居が発表された直後には、ラシーヌの敵対者たちはさまざまな批判を行っていたが、中でも異教的枠組みとキリスト教的倫理が奇妙にも接ぎ木されていることに違和感を指摘する向きもあった。たとえば、自殺をめぐるキリスト教的倫理がそれである。

死を覚悟したフェードルに対し、主人を守ろうとするエノーヌは言葉を尽くして引き留めようとする。その中に以下のような言葉がある。

何の権利があつてまた、すすんでお身に危害を加えられます？ // お命の作り主なる神々に対しては冒瀆となり、(以下省略) (第一幕第三場、岩波、p.157)⁸

命の創造主である神という言葉はギリシャ神話の世界というより、キリスト教的であろうし、死を望むことが神を冒瀆することになる、という考え方もギリシャ的とは言えないだろう。ギリシャの異教世界にあっては、神の怒りを鎮めるためであれば、生贄として娘を海に沈めることも正しいこととされる世界である。むしろ進んで自分の命をささげることが名誉と心得るのが当然でもあったのだから、確かに違和感を抱く向きもあったろう。ラシーヌ自身、これを主題に『イフィジェニー』を描いている。

また、フェードルとイポリットの関係はなるほど母と息子ではあるが、血のつながりはなく、事実上の近親相姦とは言えないのではあるが、義理とはいえ、母と息子の恋愛というのはスキュンダラスでもあり、おぞましいことであるのは確かである。しかしながら、たとえば王位の継承ということでは、亡くなった国王の弟と、亡き国王の妻が結婚するというのもさほど珍しいことではないだろう。『ブリタニキウス』では、クローディウス帝は姪であるアグリピヌと、近親であることを承

⁸De quel droit sur vous-même osez-vous attenter? // Vous offensez les dieux auteurs de votre vie;(…) (v.196-197. *ibid.*)

知の上で再婚していた。フェードルが夫テゼーの息子と恋愛関係になれば、それは不倫であるが、夫が亡くなった後であれば、近親といえども婚姻関係を築くことも不可能なことではない。フェードルの乳母にして腹心のエノーヌは、そのようにフェードルを説得する。

あなた様の恋の焰は、もはや世の常の恋の焰。
// テゼー様の死によって、あの絆は断ち切られたのです、// あなた様の恋を、恐ろしい罪、おぞましい恥としていたあの絆は。（第一幕第五場、岩波、p.168）⁹

近親相姦そのものが罪であり、おぞましいことであるのは、何も宗教的タブーに限ったものでもあるまい。むしろ生物学的なタブーが宗教的タブーに転化したと言った方がより適切だろう。したがって、近親婚はおそらく宗教の違いを超えた普遍的タブーであって、これをキリスト教的として紹介するのは、いささか不適當であろう。

だが、問題はむしろこの罪を罪として断罪するフェードル自身の意識である。フェードルは第一幕では実際に罪を犯していただろうか。彼女はその罪の深さに絶望して死を望む。登場するなり彼女は死を望んでいる。単に望んでいるばかりではなく、実際歩くこともままならず、今や死の間際にいる。それほどまでに彼女の罪は重いのだが、それは彼女が罪深い思いを捨てきれずにいるからであり、その罪意識に耐えきれないからである。罪深い考えを抱くことが罪の実行と同じであるかのように意識されているからである。犯した罪を悔いているのではなく、罪深い思いを抱いたことがすでに罪として意識されている。

『マタイ伝』は言う。「わたしはあなたがたに言う。だれでも、情欲を抱いて女を見るものは、心の中ですでに姦淫をしたのである（V,27-28）」。「頭の中で思い描いただけで、すでに罪を犯したことになる。なぜなら、すべてをみそなわす神の前では、誰にも知られるはずのない心の罪も、すべて露わになるのであり、隠しおおせないからである。フェードルが心の中に秘していた恋も、神の前では露わになった恋であり、厳然たる事実として彼女の罪を告発する。要するに、フェードルの罪意識はきわめてキリスト教的であった。実際、ラシーヌは序文の中で次のように述べている。

（前略）ここでは、ごく些細な過失までも厳しく罰せられている。罪深い思いを抱くだけでそのよ

うな思いは、罪そのものに等しくおぞましいものと見なされている。（後略）（岩波、p.140）¹⁰

『アンドロマック』にはそうした罪意識は全く存在しない。トロイ戦争の戦利品としてピリュスの捕虜となったアンドロマックにとって、亡き夫への愛を裏切ることには貞節の美德を裏切ることではあるが、罪として意識されているわけではない。ギリシャ時代にあつて、戦いに負ければ勝利者にすべてを委ねることになる。アンドロマックはピリュスの戦利品であつて、彼女が奴隷として扱われようが、妻とされようが、彼女に自由はない。彼女が亡き夫への貞節を守るのは亡き夫への深い愛ゆえであつて、罪の意識とは違う。とりわけピリュスは彼女にとって父と夫の仇であり、トロイを炎上させ壊滅させた憎むべき張本人なのだから、なおさらであつた。

『ブリタニキウス』ではネロンの犯罪は、ネロンの教育係にして後見役であるピュリュスによって激しく断罪されるだろうが、それはピュリュスの描くあるべき皇帝像を真っ向から否定する犯罪だからである。母アグリピーヌもネロンの罪を激しく非難するが、むしろアグリピーヌ自身が数々の罪を犯していることは彼女自身の口から明らかにされている。しかし、彼女が自ら犯した罪を悔いるのは、罪を犯してまでネロンを皇帝につけながらも、ネロン自身が母を裏切るからであつて、罪そのものの意識に苦しんでいるわけではない。

このように見てくると、いかにフェードルがキリスト教的罪意識に苦しんでいるかがよく分かる。

5. 宿命と自由意志というテーマ

同じ古典悲劇でラシーヌ以前の大家といえはコルネユだが、彼の出世作『ル・シッド』において、ル・シッドとシメヌの悲劇は、愛し合っていた二人にとって晴天の霹靂ともいふべき事態、すなわち両家がある日、思いがけない意地の張り合いによって敵同士になってしまう、という予想外の事態によって引き起こされる。この思いがけない事態に対し、愛する二人は、武門の名誉と愛を秤にかけ、互いに名誉を選ぶことによって悲劇が起こる。中世的な騎士道、すなわち忠義と名誉をなによりも徳とする武人の精神美が称揚され、そうした美德を自らの意志によって選択したことによって起きる二人の心理的葛藤の物語が綴られている。

これに対し、ラシーヌの場合には宿命ともいふべき事

⁹Votre flamme devient une flamme ordinaire; // Thésée en expirant vient de rompre les nœuds // Qui faisaient tout le crime et l'horreur de vos feux. (v.350-352, *ibid.*)

¹⁰(...) les moindres fautes y sont sévèrement punies; la seule pensée du crime y est regardée avec autant d'horreur que le crime même; (...) (Racine, *ibid.* p.247.)

態が悲劇をひきおこす。たとえば『アンドロマック』では、悲劇の直接の原因はトロイ戦争にあるが、その戦争の遠因はギリシャの三美神のいずれが最も美しいかを争ったことにある。その裁定をゼウスが、こともあろうに神ならぬトロイの英雄パリに委ね、自分を選んでくれたら人間の女性として最も美しいヘレネを娶せると約束したアフロディーテをパリが選んだことが直接の原因であった。いわば神々の気まぐれが、この悲劇の原因であり、人間にはどうすることもできない宿命であった。『ブリタニキウス』では、ネロンの残忍性と支配欲は、彼の実父と母から受け継いだ性格によって説明されている。欲望を抑えるように教える後見役のストア哲学にもかかわらず、恋愛の情念をきっかけに、抑えられていた本来の性格が出現することによって悲劇がおきる。いわば、遺伝的宿命が悲劇を生む。『フェードル』も例外ではない。彼女がイポリットを愛するのは、宿命であった。フェードルの姉、アリアヌスはテゼーを愛したため、孤島に捨てられることになる。二人の姉妹の母パジファエもまた、おぞましい情欲の罪によってミノタウロスという怪物を産むことになった。こうした親子の悲劇は、愛の女神ヴェニウスが秘密にしていた不倫を、パジファエの父・太陽神ヘリオスが白日の下にさらしたためであり（なぜなら明らかにすることが太陽の任務なのだから）、そのことを恨んだ女神がヘリオスの子孫に呪いをかけたためであった。いわば人間の力をこえた宿命であったと説明される。

では、こうした宿命に対し、人間的意志の力はこれに抵抗しなかっただろうか。アンドロマックは捕虜としての宿命を甘受したのだろうか。アンドロマックを妻にと望む英雄ピリュスはただひたすらおのれの情念に身を任せていただけだろうか。アグリピーヌはネロンが悪の道に進むことを宿命として見守っていただけだろうか。ネロン自身はおのれの本来の性格が出現することに抵抗しなかっただろうか。

そうではない。ピリュスは英雄としての義務に立ち戻り、アンドロマックとその子をギリシャに引き渡し、エルミオーヌとの結婚を決めたのではないか（それがかえって悲劇を生む結果になったのではあったが）。アグリピーヌもネロンを正道に戻そうと努力し、ネロン自身もブリタニキウス暗殺の直前にはピリュスの命を賭けた説得によって、みずからの欲望を抑えることに成功したのではないか。

要するに、ラシーヌもコルネイユ同様、人間的意志の力を称揚しなかったわけではなかった。いや、むしろこうした人間の意志の強さが十分に描かれていればこそ、

その意志が崩れ去るほどの宿命の強大さが強調されるのである。

この点でいえば、アンドロマックはやや趣を異にしている。アンドロマックは最後まで自分の意志を貫いたようにみえる。なるほど最後にはピリュスの愛を受け入れる形をとるが、実は婚儀が終わるや否や直ちに自殺することを決意している。つまり、形式的には亡き夫への貞節を捨て、実質的に貞節を守ることにしたのである。こうした彼女の選択は、形式としての名誉を守ろうとする『ル・シッド』的とは言えないが、それでも人間的意志を優先させた、と言えるのではないだろうか。形式として名誉を失い、実質的に名誉を守ることだろう。こうした中途半端ともいえる解決法を合理化しているのが、母親としての子供への愛情であり、「ラシーヌ的優しさ」という評判の理由であったろう。

では、フェードルはどうだろう。彼女は自らの宿命に抵抗しなかっただろうか。その抵抗の努力は彼女自身が語っている。

四六時中、生贄に囲まれて祈るわたしは、// 生贄の腹を裂いてはそこに、我が狂った分別の跡を求めた。(中略) わたしは到る所であの人を避けた。(中略) ついにわたしは、自分自身に刃向ってみようとした。 // 心を鬼にしてあの人を迫害しようと思ったのです。(第一幕第三場、岩波、p.163) ¹¹

彼女は、ヴェニウスの呪いを鎮めるため、女神のために神殿を建て、ひたすら祈った。さらに生贄をささげ、捧げられた生贄の裂けた内臓を見つめて、何か女神の怒りが解けたことを示すものがありはしないかと確認しようとした。それも効果がないのでイポリットの顔を見ないようにしたし、彼に会う機会は避けた。結局、イポリットを迫害し、追放させることで心の平安が訪れたのだ。彼女は徹底して宿命から逃れようとしたのである。だが、運命のいたずらか、イポリットに再会し、ついには死を決意する。

生きてあることを呪い、わが恋の炎を嫌悪した。
// 死んで、己が名誉を守り抜こうと考えました。(第一幕第三場、岩波、p.164) ¹²

確かにフェードルは宿命から逃れようとした。そして、呪われた宿命から自由になろうとした。すなわち彼女は人間的意志をもって宿命を乗り越えようとしたのだ

¹¹De victimes moi-même à toute heure entourée. // Je cherchais dans leurs flancs ma raison égarée.(...) Je l'évitais partout.(...) Contre moi-même enfin j'osai me révolter : // J'excitai mon courage à le persécuter. (v.281-282, v.289, v.291-292, ibid.)

¹²J'ai pris la vie en haine, et ma flamme en horreur. // Je voulais en mourant prendre soin de ma gloire, (v.308-309, ibid.)

である。そして、その宿命から逃れることが不可能になったと気づいたとき、彼女は意志の究極の力をもって自らの命を絶つことを決意する。

彼女はエノースに自らの罪を明かす。彼女の意識の中にだけ閉じ込められていた罪は今や人も知る罪となる。罪が彼女の意識に閉じ込められたままであったならば、死とともにその罪も消え去り、彼女の名誉が損なわれることはない。だが、口に出された罪は彼女の死後もエノースの記憶にとどまり、彼女の名誉を脅かす。さらにフェードルの恐れは、恐れにとどまらぬ予言となって彼女を「いよいよ罪深い女」に追い込む。彼女はそのことをエノースに打ち明ける前から充分心得ていた。

わたしの罪を、わたしを打ちひしぐ運命を教え
たからとて、// やはりわたしは死なねばならぬ、
しかもいよいよ罪深い女として。（第一幕第三場、
岩波、p.160）¹³

だが、夫テゼーの死の報せは、あたかも女神ヴェニウスの罫のごとく彼女を更なる罪へといざなう。彼女はイポリットに直接告白してしまう（第二幕第五場）。テゼー死去の報が誤りであることが判明した後、エノースがイポリットに濡れ衣を着せるのをフェードルは黙認する。さらに、イポリットがアリシーに恋していることが分かると、ついに嫉妬のあまりアリシーを殺そうとまで思う。再び理性が戻ると、そのあまりの罪深さに気づき、ついに宿命を引き受けることを決意する（第四幕第六場）。

このように見てくれば、神の定めた宿命から逃れようとして、罪を犯さぬ生き方（=死）を選びながら、人間をこえた力の前に、罪を犯した人間として罪を悔いながら宿命を受け入れる物語であったことが分かる。

これを別な角度からみれば、人間の自由意思の問題といえることができるだろう。人間はみずからの自由な意志によって善や悪を行い得るのかどうか、この問題はきわめてラシーヌの同時代的問題意識であり、パスカルをはじめキリスト教に関わる多くのひとびとの関心の的であった。原初の一撃を神が与えた後、世界は合理的かつ自律的に運動を始めたように、神による人類創造のあと、人間は神の恩寵なしに自律的に善をおこなうのか？ 楽園を追放された人間に果たして善をおこなうことができるのか？

こうしたキリスト教の観点からすれば、あたかもフェードルは楽園から追放された人間の原罪を引き継いだ、生まれながらに罪ある存在と見ることができる。生まれながらに罪ある存在、それをラシーヌはギリシャ神話の神話的エピソードによって説明しようとしたのだろう

か。そのように生まれながらに罪ある存在である彼女が、人間的意志の力によって罪から逃れようとする、あるいは罪を実際に犯すことがないように努めながらも、さだめから逃れることができない物語として理解すべきなのだろうか。あたかも神の力を借りることなく正しい一生を過ごそうと努めながら、それを果たせない人間のさだめ（掟）の物語としてみるべきなのだろうか。ジャンセニスム的表現をすれば、神の恩寵なしに人間は義を行うことはできないという、きわめてドグマ的な物語と読むことも全く不可能とも言えないだろう。

6. むすび

さて、以上のように『フェードル』における宗教的テーマについて述べてきたが、そもそもこの作品を宗教的テーマから見ることそのものが適当なのか、という疑問は当然あるだろう。実際のところ他の宗教的著作とこの作品を比較することにどれほどの意味があるのか。むしろ他の同時代の文学作品、たとえばラ・ファイエットの『クレーヴの奥方』と並べた方が自然ではなからうか。夫を尊敬しながらも心の中では他の男を愛しているクレーヴの奥方。ただし、貞節を守り男に肉体は許さない。それが夫への尊敬の証。たとえ夫が死んでも、結婚はしない。最後に彼女は世俗のまま修道院にひきこもるが、それはすなわち社会的死に近い¹⁴。それがクレーヴの奥方であった。クレーヴの奥方が結婚した直後にヌムールと出会い、恋を初めて知ったように、フェードルは王妃として夫の息子イポリットに出会い、初めて恋を知ったのだ。『フェードル』では許されざる恋ゆえの激しい恋心。『クレーヴの奥方』では結ばれない恋ゆえにますます純化する愛の物語。美德の鑑として称賛された生涯をすごす奥方と、罪深い女として自殺するフェードル。情念と理性の葛藤に苦悩する心理の流れそのものが、人間のあるがままの姿を再現したドラマとして、これら二つの作品を並べることのほうが、より適切ではないだろうか。

確かにそうだろう。ラシーヌの時代が求めたもの、そして当時の観客が受け取ったメッセージは情念のドラマであって、宗教的メッセージではなかったろう。だが、『フェードル』以降、彼は一般向けに作品を発表することはなかった。こののち劇作家としてのラシーヌは社会的な意味では筆を絶ったのであり、劇詩人ではなかった。王家の修史官として高額の年金を受け、国王の厚い庇護を受けながら暮らすことになったのである。だが、彼が筆を絶って11年後、あくまで国王の御前でのことであったが『エステル』、その2年後『アタリー』を発表して

¹³Quand tu sauras mon crime et le sort qui m'accable, // Je n'en mourrai pas moins : j'en mourrai plus coupable. (v.241-242, ibid.)

¹⁴ ジャン・コクトーの脚色による1961年の映画化では、彼女が恋人ヌムールを受け入れたとき、彼女はすでに死んでいることになっている。

いる。これらはともに宗教的エピソードを扱っていた。そして、国家の圧力を受けるポール・ロワイヤルに同情を寄せるように、『アタリー』の2年後には『ポール・ロワイヤル史概要』を書き始めているのである。いうまでもなくポール・ロワイヤル修道院といえば、孤児のラシーヌが教育を受け、パスカルが『プロヴァンシャル』で弁護し、異端としてローマとパリ大学の断罪を受け、解散されたキリスト教の宗派である。ラシーヌにはポール・ロワイヤルに傾倒する内的必然性が何か存在したであろうし、これまで見てきたように『フェードル』の中にきわめてキリスト教的性格を見ることがもできる。

われわれが、主人公フェードルの罪意識に、作家ラシーヌの何か特別なもの、きわめて個別・具体的な何かを、うっすらとではあるが感じるのは間違っているのだろうか。そのように感じ取った時点ですでにラシーヌの術中にはまったということなのだろうか。そうかもしれない。いずれにせよ、ここではラシーヌの特別な、個別・具体的な何かには触れないことにする。いや、触れることができないのだ。憶測が憶測を生む妄想にはそれにふさわしい場が必要であろうし、いまはその場ではないのだから。

いささか平凡な結論を言えば、『パンセ』が想像力に翻弄される人間理性を描くように、『フェードル』は情念に翻弄される弱い存在としての人間の業を描くきわめて普遍的な人間の真実の物語なのである。そして、真の普遍が個と通底するように、それはまた時代の抱える個別的問題とも必然的に通じ合っている。それゆえに、宿命と自由意志をめぐる時代的な宗教的テーマを重ね合わせて読むことも許されるであろう。